2024年
春号

こころだより

病院の理念

県民の心の健康を支える
質の高い医療の提供

特集 ギャンブル依存症とは？

令和６年能登半島地震での山口県DPAT活動報告
令和5年度認知症疾患医療センター合同研修会を開催しました
診療のご案内

編集：広報委員会
発行：山口県立こころの医療センター
山口県宇部市東岐波4004-2
TEL:0836-58-2370（代表）

地方独立行政法人
山口県立病院機構

Kokorodayori 特集

ギャンブル依存症とは？

副院長　藤田（ふじた）　実（みのる）

普段、私たちはギャンブル依存と言っていますが、WHOでは依存症は薬物依存症に対してのみ使う事になっているので、ギャンブル依存というのは、本当はギャンブル障害（ギャンブル行動症）が正しいのです。

私たちはギャンブルや買い物の度が過ぎると、依存という言葉を使いますが、こういったコントロールを欠いた行為は、アディクション（嗜癖）と言います。アルコール・薬物依存も、行動面で言えばアディクションです。

アディクションには3つの形態があります。サブスタンスアディクション（物質依存）、プロセスアディクション（行動嗜癖）、リレーションシップアディクション（関係性嗜癖）の3つです。今回お話しするギャンブル障害は、プロセスアディクションです。

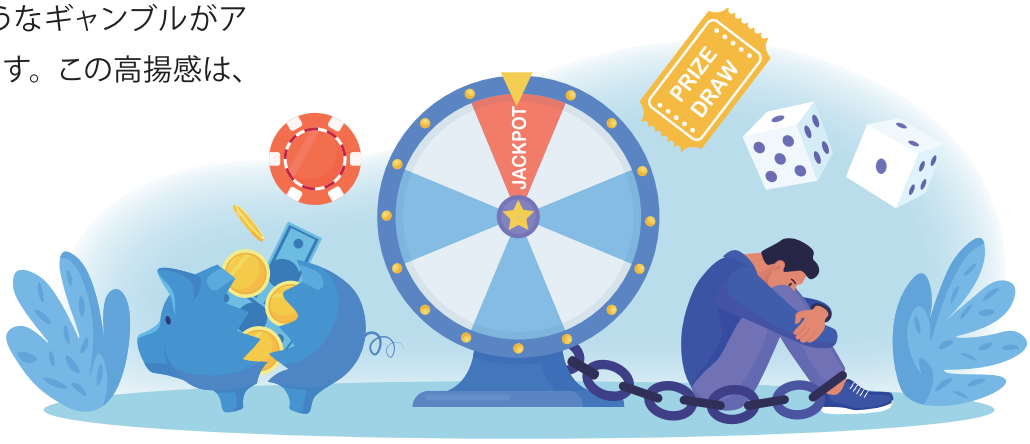
アディクションの原因は脳の中の脳内報酬系と呼ばれるシステムでの過剰なドーパミン分泌です。アルコールや薬物だと、ドーパミンの分泌を直接増やす作用がありますが、ギャンブルはどうでしょうか、やはり同様にドーパミンの過剰分泌を引き起こします。ギャンブルで勝って興奮することを繰り返していると、一部の人は、ギャンブルを想像しただけでわくわくして落ち着かなくなります。このとき、やはり脳内報酬系ではドーパミンが過剰に分泌されているのです。ドーパミンはギャンブルで勝ったときだけでなく、勝ちを期待しているときも分泌されます。だから、ドキドキわくわくするのです。当然その期待が高まるようなギャンブルがアディクションになりやすくなります。この高揚感は、ギャンブル障害の人にとっては、薬物など比較にならないくらい自分を変えてくれる効果があると言います。

どんなギャンブルが依存症になりやすいのでしょうか、スロットマシーンなどは、たとえば7が揃ったら、当たりで7が続いて、最後に違う数字が来て外れると、ニアミス効果と言って、「惜しい、またやりたい」と思います。こういったEGM（電子的ゲームマシン）が一番依存を生じ易いと言われています。

ギャンブル障害の人は、前頭葉機能が低下していると言われています。そのため判断力が低下しています。ギャンブルで負けた後に、またギャンブルでお金を取り戻そうと考え、ギャンブルを繰り返します。こうしてギャンブルにはまって、お金が無くなると、家族知人に嘘をつきながら、まず生活費を使う、自分の持ち物を売る、家族のものを売る、サラ金に手を出す、借りるところが2社3社と増えてどうにもならなくなります。嘘と借金がギャンブル障害の2大症状と言われています。

ギャンブル障害にならないためにはどうしたらいいでしょうか？

ギャンブルをしないのが一番ですが、ギャンブルが好きな人は、ネットでSOGS（ギャンブル障害自己スクリーニングテスト）を見つけてやってみることです。当てはまる項目があれば、ギャンブルから手を引くことをおすすめします。



令和6年能登半島地震での山口県DPAT活動報告

山口県DPAT先遣隊

令和６年1月1日16時10分、石川県能登地方にマグニチュード7.6の地震が発生し、輪島市と志賀町では最大震度7を観測しただけでなく、珠洲市などでは津波も襲来し、甚大な被害が発生しました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げるとともに、亡くなられた方へ深く哀悼の意を表します。

さて、DPATとは災害派遣精神医療チーム(Disaster Psychiatric Assistance Team)のことで、大規模自然災害等発生時に被災地域の精神科医療機関や精神保健活動の支援を行う専門チームのことです。山口県にはDPAT先遣隊が2隊(両隊とも当院)と少数ながら、各自業務と並行しながら、実災害支援活動に向けて日々訓練を行っています。そうした中、DPAT事務局を通じて石川県より派遣要請があり、山口県DPAT先遣隊として医師１名、看護師２名、業務調整員2名が1月２０日から1月２３日まで支援活動を行うこととなりました。

派遣当初は能登中部保健福祉センター(七尾市)にある、現場で活動するDPAT隊を指揮するDPAT活動拠点本部へ参集し、珠洲市や輪島市、穴水町の避難所等で活動を行う予定でした。能登半島地区は当時断水が続いており、お風呂は利用できず、トイレも水を流すことが出来ない状態と聞いていたので、非常食やトイレ用品を多く積載し、石川県に向けて出発しました。活動日前夜に活動場所の変更の連絡があり、石川県庁に設置してある石川県DPAT調整本部での活動を行うこととなりました。

DPAT調整本部は被災地で活動している全てのDPAT隊を統括することを目的に設置され、DMATやJMATなど様々な専門支援チームと同じフロアで業務にあたりました。

私達が行う活動は縦(DPAT事務局やDPAT活動拠点本部)と横(DMATや県担当者)の連携が非常に重要で、業務の多くは本部内や活動拠点本部とのミーティング、他の支援チームとの会議が占めました。また、現場で活動するDPAT隊の宿泊先の確保、避難所生活で不調となった精神科通院患者の入院受け入れ先の調整、DMATや日赤などの他支援チームからの支援者支援についての協働依頼など、調整する内容は様々でしたが、現場ニーズの正確な把握と迅速な対応が常に求められた4日間でした。

最後に、発災から今日まで休みなく支援・活動している石川県DPATの皆様や石川県健康福祉部障害保健福祉課DPAT担当者の皆様に敬意を表するとともに、一日も早い復興を山口県から祈念しています。

出 発 式

DPAT調整本部での活動の様子

令和5年度認知症疾患医療センター合同研修会を開催しました

認知症疾患医療センター

令和6年2月18日(日)、山口県と県内８カ所の認知症疾患医療センター合同で、「認知症の人と共に」を全体テーマに研修会をWEBにて開催し、220名の参加がありました。

この研修会は、県内の認知症疾患の保健・医療水準の向上を図ることを目的に、保健・医療・福祉の専門職を対象として毎年開催しています。

行政説明「山口県の認知症施策について」を説明後、講演Ⅰでは、三豊市立西香川病院院長、認知症疾患医療センター長の大塚智丈先生より、「認知症の人の心を知る」をテーマにご講演いただきました。講演では、認知症をもつ人が何に辛さを感じているかを理解し、診察の場面で実践されている本人の認知症観を改善させるような説明の仕方や心理的支援としてのアプローチ方法について紹介していただきました。参加者からは「自分の関わり方を振り返るきっかけとなった」などの感想が寄せられました。

講演Ⅱでは、県立広島大学保健福祉学部作業療法学科学科長・教授の西田征治先生より、「“活動”を通して自分らしさを発揮する認知症の人と家族への支援」をテーマにご講演いただき、その人にとって意味や価値のある活動を見つけていくことの重要性を事例や動画を交えて説明していただきました。また、活動の質を評価するツールとしての「AQOA(アコア)」についても紹介されました。参加者からは「実践的な内容で活かしていきたい」との感想が多く、特に動画で見せていただいた、興味ある活動を前に認知症当事者の方の表情がそれまでと全く変わったことに感銘を受けたとの声が多く聞かれました。

感染拡大防止のためWEBでの開催となりましたが、今後も認知症疾患や認知症疾患医療センターについて理解を深めていただけるよう取り組んでいきたいと思います。

三豊市立西香川病院院長
認知症疾患医療センター長
大塚 智丈　先生

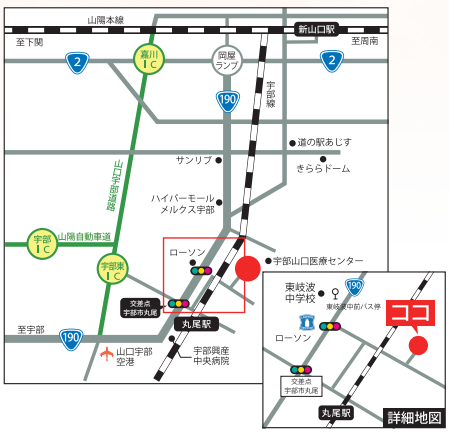
県立広島大学保健福祉学部
作業療法学科学科長・教授
西田 征治　先生

診療のご案内

外来診察担当医						
	初診			再診		
月	(物忘れ・高次脳) 兼　行	(一般) 角　田		藤　田	磯　村	(禁煙、第1・第3) 藤田・新造
火	(思春期) 村　田			坂　倉	山大派遣 医師	(兼　行)
水	(一般) 原　賀			兼　行	村　田 (AM一般、PM思春期)	新　造
木	(依存症) 藤　田	(一般) 新　造	(一般) 萩　原	兼　行	角　田	原　賀
金	(一般) 坂　倉			藤　田	藤　井	水　本

※最新は病院ホームページをご覧ください。
初診・再診とも予約制となっております。予めお電話でご予約されてご来院ください。
外来直通電話：0836-58-2327

交通のご案内



お車/山口宇部道路「宇部東ＩＣ」より丸尾方面へ約5分
電車/ＪＲ宇部線「丸尾駅」より徒歩約15分
バス/宇部市営バス「東岐波中学校前」より徒歩10分

地方独立行政法人 山口県立病院機構
山口県立こころの医療センター

〒755-0241　山口県宇部市東岐波4004-2
TEL：0836-58-2370（代表）
　　：0836-58-2327（外来直通）
FAX：0836-58-6503

こころの医療センター　検索

https://www.y-kokoro.jp/